

死を描く場面における「情動性」と「感情の共同体」

—夕顔と紫の上を中心に—

コモバ エカテリーナ
KOMOVA Ekaterina

序言

『源氏物語』は「世界最古の心理小説」としても評価されるが、そうした海外での大絶賛よりもずっと前から、日本においても文化的遺産としてよく知られていた。その登場人物と読者たちの中に情動的な反応を引き起こす力があるという議論は、18世紀の国学者・本居宣長の著作にまでさかのぼれる。しかし、『源氏物語』は、そもそも物語テキストの中でどのように登場人物と読者の感受性を養い、さらに、どのように情動的な反応を引き起こすのだろうか。本論文では、この点に答えるため、夕顔と紫の上の死を描く場面に焦点を当て、『源氏物語』における感情的状況をアフェクト理論、ならびに感情に基づく共同体という視点から考察する。こうした分析は、実は、感情の歴史の研究、またアフェクト理論といった学際的な分野に、日本文学を紹介してゆこうとする現在構想している研究プロジェクトの一環である。

研究の背景と理論

長年にわたり、『源氏物語』は日本国内でも海外でも学術上の注目を集めつづけ、複数の英訳をはじめ、部分訳も含めれば35以上の言語に翻訳されている。『源氏物語』のテキストにおける散文と795首の和歌との関係はしばしば議論の対象となってきた。例えば、エスペランザ・ラミレス・クリステンセン氏によると、『源氏物語』における和歌は、物語の流れを遅らせ、周期的なナレーショ

ンを作成しつつ、読者に対しては、プロットをたどらなくてもその残響を感じさせるはたらきをもつとのことである⁽¹⁾。また、戦後の『源氏物語』研究者でも特に有名な秋山虔氏は、物語の展開に対する引歌の重要性を検討し、特に引歌の展開が女性によって書かれた散文において最初にみられたということも示された。また、もしも『源氏物語』の作者が男性であったならば、この作品が現在に通ずる叙情的な形式では存在し得なかったとも主張した⁽²⁾。さらに、ハルオ・シラネ氏の研究において、文学的慣習と社会・政治的伝統といった背景に対して、『源氏物語』の抒情性が位置づけられた⁽³⁾。

多くの先行研究では、本質的に『源氏物語』を文学上の情動的な作品として扱い、その情動的特徴のいくつかを特定している。ただし、他方において、アフェクトやそれによる登場人物と読者の間の感受性についてはこれまであまり取り上げられてこなかったように思われる。しかし、この影響を分析することは、『源氏物語』を生み出した文学的、文化的、社会・政治的な文脈を理解するために大変重要である。

本論文では、主要登場人物の死の場面、特に夕顔と紫の上が最期を迎える箇所などの、感情が極度に高まる場面において、『源氏物語』は、和歌、和歌的散文、風景描写、地の文などを通してどのように物語世界を構築し、登場人物ならびに読者にどのような情動的反応を引き起こすのか、という問題について考察する。今回、死の場面のみにも焦点を当てた理由は、紙幅の制約のためだが、理由はもう一つある。死という現象は平安貴族が遭遇する感情的な状況のごく一部だが、死は普遍的な現象でもあるので、その例を通じて、『源氏物語』がアフェクトを扱う特有の方法を示しやすいと考えるためである。

ここで、本論文のキーワードとなる「アフェクト」という言葉について述べる。情動性ならびに感情の社会性を研究する「affect studies」は、欧米の文学研究ではかなり前から普及している考え方だが、管見の限り日本では近年になってようやく使われ始めた段階のようである。アフェクトという考え方は、感情の高まっている状況へ参加し刺激を受けること、すなわち、聴衆や読者集団の

感情的・心理的・身体的反応の生起と作用に注目する。一般的に言えば、アフェクトは言葉以前の情動らしい反応である。そして、その体験者が自分の言語的、文学的、および社会的な背景に基づいて、アフェクトの反応に「悲しい」「美しい」「クール」などの、感情的レッテル、また美的レッテルを貼るのだが、多くの場合、そのようなレッテルは、体験者が属するコミュニティによって決定される。したがって、「affect studies」は、ある特定のコミュニティの中でそうした情動的な反応がいかに表現され、伝えられ、作用しているかを考察する研究分野である。この分野では、共通の価値観や好みに基づいて同種の情動的反応を共有する集団から特定の「感情の共同体」(emotional community) が生まれ、その共同体は、好悪や快・不快などを規定する共通の「情動の言葉」(affective vocabulary) を使用し始める、といった見方をする。

『源氏物語』の54帖全体で、およそ48人の登場人物が死ぬことになる。ある人物の死はほんの一瞬の言及に過ぎないということもあるが、たとえば源氏と深い関係にあった紫の上の死にもなう喪は、長々と描かれている。本論文の課題となる女性たちの死の場面には複数の興味深い共通点がある。それらをもとに、下記の分析では、特に次の4つに焦点を当てる。すなわち、1) ナラティブの構造、2) ナラティブにおける死の脱焦点化、3) ナレーションの視点、そして4) 登場人物どうしの感情のコミュニティ、ならびに登場人物と読者の間の感情のコミュニティの形成、この四つである。

ナラティブの構造

女性主人公の死をめぐるストーリーアーク、すなわちストーリーの継続的なラインは、悲劇的な結末を迎えることを目的としている。その死は突然の予期せぬ出来事ではなく、むしろ、物語の中の多くのヒントによってあらかじめ示されていると言える。読者には最初からたいていは見当がつくだろう。そのため、死をめぐるストーリーアークの主なポイントは、次に何が起こるのかということより、それがどういうわけで起こるのかという点になる。

たとえば、夕顔の死に至るまでの悪い兆しとみえるヒントをとらえてみよう。まず、源氏が初めて夕顔とやりとりを交わすのは、死にかけている乳母を見舞ったときであった。次に、夕顔と一緒に時間を過ごしつつ、源氏は彼女が突然姿を消すのではないかと心配している。さらに、源氏は夕顔を相手にして、来世、つまり死後のことにも多く言及している。

こうしたナラティブは、あちこちで死のヒントを紹介することにより、不安な雰囲気を作り上げる。また、死の場面のクライマックスに至る効果を得るために、そうした不安な雰囲気と、登場人物の希望もしくは意志力などとの対比に重点を置いている。例えば、源氏は夕顔との将来について懸念を感じているのに、源氏自身の行動や意志力を通してその結果を変える力があると確信している。より具体的に言うと、次の本文1⁽⁴⁾のように、源氏は、もし自分が夕顔をほったらかしにするようなことがなければ、彼女が消えてしまうことはないだろうと信じこんでいる。

本文1 (Vol.1, 「夕顔」 p.115)

けしきばみて、ふと背き隠るべき心ざまなどはなければ、かれがれにと絶えをかむおりこそはさやうに思ひ変はることもあらめ、心ながらも少し移ろふ事あらむこそあはれなるべけれ、とさへおぼしけり。

同様に、本文2にみられるとおり、夕顔を荒れ果てた廃院に連れ出したときに、源氏は不快な雰囲気を無視し、「鬼などは、確かにこのわたしのことなら見逃してくれるだろう」と誇らしげに宣言する。

本文2 (Vol.1, 「夕顔」 pp.119-120)

日たくるほどに起き給て、格子手づから上げたまふ。いといたく荒れて人目もなく、はるばると見渡されて、木立いとうとましくもの古りたり。け近き草木などはことに見どころなく、みな秋の野らにて、池も水草に埋も

れたれば、いとけ疎げになりける所かな。べちなうの方にぞ曹司などして人住むべかめれど、こなたは離れたり。「け疎くもなりける所かな。さりとて鬼などもわれをば見ゆるしてん」との給ふ。

紫の上の死の場面も、同様である。紫の上が病気との長い闘いに次第に屈してゆくあいだ、本文3と4のように、その描写は病気の悪化と寛解との間で何度もゆれる。

本文3 (Vol.4,「御法」p.162)

紫の上、いたうわづらひ給し御心ちの後、いとあづしくなり給て、そこはかとなくなやみわたり給こと久しくなりぬ。いとおどろおどろしうはあらねど、年月重なれば、たのもしげなく、いとどあえかになりまさり給へるを、院の思ほし嘆く事限りなし。

本文4 (Vol.4,「御法」p.167)

夏になりては、例の暑さにさへ、いとど消え入り給ぬべきおりおり多かり。そのこととおどろおどろしからぬ御心ちなれど、ただいとよはきさまになり給へば、むつかしげに所せくなやみ給こともなし。

読者は、紫の上の懸念、また来世に向けての努力を知っているため、最悪の事態を予想しているだろう。しかし、ドラマティック・アイロニーのため、主人公たちはなおも最良の事態を期待している。本文5のように、紫の上の病の状態が以前とはあまり変わらないことを望みつづけていた源氏は、紫の上がついに亡くなったことにより、呆然とするばかりである。

本文5 (Vol.4,「御法」p.171)

御手をとらへたてまつりて、泣く泣く見たてまつり給に、まことに消えぬ

く露のこちして、限りに見え給へば、御誦行の使ども、数も知らず立ちさはぎたり。さきざきも、かくて生き出で給おりにならひ給て、御物のけと疑ひ給ひて、夜一夜さまざまの事をしつくさせ給へど、かひもなく明けはつるほどに消えはて給ひぬ。

ナラティヴにおける死の脱焦点化

ここまでみてきたように、『源氏物語』におけるナラティヴは死を予知させるように構成されているのだが、実は、それと同時に死を脱焦点化することもおこなっている。要するに、テキストの大部分は死を導く方向へと焦点を当てているが、死そのものについては詳しく説明しないのである。亡くなってゆく女性の苦しみなどは詳しく語られず、彼女の忍耐の様子もとらえられない。本文5の紫の上の場合もそうだが、死そのものはわずか一文で示される。しかしながら、ここで強調しなければならないポイントの一つは、死亡前と死亡後のその記述が時に極めて類似しており、生と死の境界を曖昧にしているということである。

『源氏物語』の「帚木」巻にある「雨夜の品定め」で、夕顔は、そもそも源氏の友人である頭中將によって、元恋人として紹介されていたのだが、源氏は彼女の柔和さと子供のような気質に惹かれ、彼女のことを本文6のように評価する。夕顔は美人というわけではないのに、源氏は彼女のか弱さ、また不安がる性格に惹かれている。一寸した事に怖がる夕顔は、最初から片足を棺桶に突っ込んでるように描かれる。

本文6 (Vol.1, 「御法」 p.117)

白き裕、薄色のなよよかなるを重ねて、はなやかならぬ、姿いとらうたげにあえかなる心ちして、そこと取り立ててすぐれたる事もなけれど、細やかにたをたをとして、物うち言ひたるけはひ、あな心ぐるし、とただいとらうたく見ゆ。心ばみたる方をすこし添へたらば、と見たまひながら、猶

うちとけて見まほしくおぼさるれば……

本文7から9で、彼女がついに最期を迎えると、その容姿が生前のさまを思い出させるため、源氏の感情ははげしく揺さぶられる。夕顔の死体の小柄な感じ、そして可愛さはまだ生きていたときのことを思い出させる。源氏が恐れていたことも現実のものとなった。その半死半生の様子が語られた夕顔は、継ぎ目なく生から死へと移行しているようである。

本文7 (Vol.1, 「夕顔」 p.124)

かい探り給ふに、息もせず。引き動かしたまへど、なよなよとしてわれにもあらぬさまなれば、いといたく若びたる人にて、物にけどられぬるなめり、とせむ方なき心ちし給。

本文8 (Vol.1, 「夕顔」 p.128)

この人をえ抱き給ふまじければ、上蓆にをしくくみて、惟光乗せたてまつる。いとささやかにて、うとましげもなくらうたげなり。したたかにしもえせねば、髪はこぼれ出でたるも、目くれまどひてあさまじうかなしとおほせば、なりはてんさまを見むとおほせど……

本文9 (Vol.1, 「夕顔」 pp.133-134)

いかにわびしからんと見給。おそろしきけもおほえず、いとらうたげなるさまして、まだいささか変りたるところなし。手をとらへて、「われにいま一たび声をだに聞かせ給へ。いかなるむかしの契りにかありけん、しばしのほどに心を尽くしてあはれに思ほえしを、うち捨ててまどはし給がいみじきこと」と声もおしまず泣き給ふこと、限りなし。

一方、紫の上の死の描写も、同様に生と死の間の境界を曖昧にする。ひとつ

の巻にしか登場しない夕顔とは異なり、紫の上は幼少期から死に至るまでのナラティヴの中で際立っている。本文10では、明石の中宮の視点から亡くなる直前の紫の上の様子がとらえられる。

本文10 (Vol.4, 「御法」 p.170)

こよなう痩せ細り給へれど、かくてこそあてになまめかしきことの限りなさもまさりてめでたかりけれと、来し方あまりにほひ多く、あざあざとおはせし盛りは、中中この世の花のかほりにもよそへられ給しを、限りもなくらうたげにおかしげなる御さまにて、いとかりそめに思ひ給へるけしき、似る物なく心ぐるしく、すずろにものがなし。

その死体は、次の本文11のように、やはり夕顔と同様に評価される。源氏はこれで最後だと認めているのに、その死においてすら、紫の上の御髪は完璧で、顔色は輝いていた。

本文11 (Vol.4, 「御法」 pp.173-174)

ほのほのと明けゆく光もおぼつかなければ、大殿油を近くかかげて見たてまつり給に、飽かずうつくしげに、めでたうきよらに見ゆる御顔のあたらしさに、この君のかくのぞき給を見る見るも、あながちに隠さんの御心もおぼされぬなめり。「かく何事も、まだ変はらぬけしきながら、限りのさまはしるかりけるこそ」とて、御袖を顔におし当て給へるほど、大将の君も涙にくれて、目も見え給はぬを、しゐてしほりあけて見たてまつるに、中々飽かずかなしきことたぐひなきに、まことに心まどひもしぬべし。御髪のだうちやられ給へるほど、こちたくけうらにて、露ばかり乱れたるけしきもなう、つやつやとうつくしげなるさまぞ限りなき。火のいと明きに、御色はいと白く光るやうにて、とかくうちまぎらはすことありしうつつの御もてなしよりも、言ふかひなきさまにて、何心なくて臥したまへる御あ

りさまの、飽かぬ所なしと言はんもさらなりや。なのめにだにあらず、たぐひなきを見たてまつるに、死に入るたましみの、やがてこの御骸にとまらなむと思ほゆるも、わりなきことなりや。

ナレーションの視点

ナラティヴとしては、死の過程を詳しく網羅的に描写するのを避けている。その代わりに、周りの登場人物の目をとおして亡くなってゆく女性の死の前後の容姿を詳しく説明することは、ナラティヴの視点に関する問題を提起する。言い換えれば、ナラティヴによって死にかけている当人の苦痛を読者が感じたり、その苦しみを不憫に思ったりするための十分な情報が示されない場合、私たち読者としては、一体誰に対して感情的に調和してゆくことになるだろうか。もちろん、一つの手がかりは、その場面にいる登場人物から得られる。その人物の観察により、読者は亡くなってゆく女性の外見について知らされる。夕顔の場合は、源氏以外に右近がいて、また惟光もある程度世話をしている。また、紫の上の場合は、死ぬ前に明石の中宮に、また死のあとには夕霧に見つめられている。言うまでもなく、物語はおもに主人公源氏を中心に構成されているが、女性の死の場面が実際にどの程度まで源氏の体験を中心に展開しているのかという問題は、より詳しく検討すべきことである。

本文12のように、源氏よりもずっと長い間、夕顔のそばで仕えてきたはずの右近は、源氏の悲しみに心を動かされ、自分自身の悩みを一時的に忘れてしまい、その代わりに源氏が抱く感情に左右されている。

本文12 (Vol. 1, 「夕顔」 p. 136)

よはげに泣き給へば、言ふかひなきことをばおきて、いみじくおしと思ひきこゆ。

そして、本文13では、いよいよ悲しみにくれる源氏が、夕顔こそ理想的な女

性であったと嘆くのを受け、右近も同様にその喪失を嘆く。しかし、それは夕顔を喪失したことではなく、むしろ源氏が自分の理想を失ったことへの共感であろう。実際、本文14のように源氏の悲しみの理由を何も知らない登場人物でさえ泣いてしまうほど、感情的に深いものとして描かれている。

本文13 (Vol.1, 「夕顔」 p.141)

はかなびたるこそはらうたけれ。かしこく人になびかぬ、いと心づきなきはざなり。身らはかばかしくすくよかならぬ心ならひに、女はただやはらかに、取りはづして人にあざむかれぬべきがさすがにものづつみし、見ん人の心にはしたがはんなむあはれにて、我心のままに取りなをして見んに、なつかしくおほゆべき」などのたまへば、「この方の御好みにはもて離れたまはざりけりと思給ふるにも、くちをしく侍わざかな」とて泣く。

本文14 (Vol.1, 「夕顔」 pp.133-134)

われにいまたび声をだに聞かせ給へ。いかなるむかしの契りにかありけん、しばしのほどに心を尽くしてあはれに思ほえしを、うち捨ててまどはし給がいみじきこと」と声もおしまず泣き給ふこと限りなし。大徳たちも、たれとは知らぬに、あやしと思ひてみな涙をとしけり。

死にゆく紫の上の場合も、自身に対する懸念より、自分の死後しばらくこの世に残る源氏への懸念のほうが顕著である。一方、本文15のように、ものの心を知らない卑しい人でさえ、源氏の悲しみに感動して泣いたと言われている。

本文15 (Vol.4, 「御法」 p.175)

空を歩む心ちして、人にかかりてぞおはしましけるを、見たてまつる人も、さばかりいつかしき御身をと、もの心知らぬ下種さへ泣かぬなかりけり。御をくりの女房はまして、夢路にまどふ心ちして、車よりまろび落ちぬべ

きをぞ、もてあつかひける。

感情のコミュニティの形成

ここまで指摘してきたように、死の場面では、死者よりもその人を喪失した体験者にナラティブの強調がある。その体験者として、源氏は一貫してその役割を担うが、他の登場人物もしばしば人を喪失した体験者となっている。アフェクト理論の視点からみれば、何人かの登場人物が死の場面に集合的に参加することには、明確な理由がある。源氏は女性が失われたことに対処するため、内部の独白などに後退したりしない。無論、時折他の登場人物が知らない源氏の感情的な状況を読者の方が知らされているというような例も多くあるだろう。そうしたケースは、源氏が感情をコントロールしようとする場面でよく見られる。

そのような体験者としての源氏は、本文16のように感情をコントロールできないことが多いのだが、こういうあり方にはある種の物語的な魅力がある。ただし、彼がそもそもそれをコントロールしようとする事実から、実は大きな問題が明らかになる。すなわち、感情に関わる判断と経験を支配する集合的、および社会的な制約を認識しているということが示唆されるだろう。

本文16 (Vol.1, 「夕顔」 pp.143-144)

阿弥陀仏に譲りきこゆるよし、あはれげに書き出で給へれば、「ただかくながら、加ふべきこと侍らざめり」と申す。忍び給へど、御涙もこぼれて、いみじくおぼしたれば、「何人ならむ。その人と聞こえもなく、かうおぼし嘆かすばかりなりけん宿世の高さ」と言ひけり。

紫の上の例に戻ると、本文17で紫の上の病気が進行するにつれて、彼女が非常に痩せおとろえてゆくことは明らかだ。しかし、彼女を見ている明石の中宮は、紫の上の苦痛などよりも、むしろその姿から、紫の上が浮き世のはかなさ

などのイメージをいかに満たしているかという点に共感しているようである。

本文17 (Vol.4,「御法」 p.170)

こよなう瘦せ細り給へれど、かくてこそあてになまめかしきことの限りなさもまさりてめでたかりけれと、来し方あまりにほひ多く、あざあざとおはせし盛りは、中中この世の花のかほりにもよそへられ給しを、限りもなくらうたげにおかしげなる御さまにて、いとかりそめに思ひ給へるけしき、似る物なく心ぐるしく、すずろにものがなし。

紫の上の病弱でやせ衰えた容姿は当時の美的標準からほど遠いだろうが、その状態は、彼女が頻繁に比較される露や花のようにはかないことを周りの人々に思い出させる。それゆえに理想的なこととも見なされているようである。紫の上は、自分が亡くなった後、愛する人に何が起こるかを心配している。逆に、彼女がいなくなるとその愛する人が彼女のことを人や友人として恋しく思うか、また寂しがるのかということなどは、ほとんど何も語られない。彼女が死にかけている間、源氏たちは彼女の死が差し迫っていることを嘆く。なぜなら、それは彼らの人生の非永続性についての考えを強化するためである。何といても、その視点からみれば、紫の上の死は、そのような場面で一般的に使用される標準化された和歌的なイメージに完全に適合している。

次の本文18では、紫の上、明石の中宮、および源氏の間最後のやり取りで、そうした和歌的なイメージがより強調されている。

本文18 (Vol.4,「御法」 p.170)

風すごく吹出でたる夕暮に、前栽見給とて、けうそくによりみ給へるを、院渡りて、見たてまつり給ひて、「けうはいとよく起きみ給めるは。この御前にては、こよなく御心もはればれしげなめりかし」と聞こえ給。かばかりの隙あるをもいとうれしと思ひきこえ給へる御けしきを見給も、心ぐる

しく、つるにいかにおぼしさはがんと思に、あはれなれば、

をくと見る程ぞはかなきともすれば 風に乱る萩の上露
げにぞおれかへりとまるべうもあらぬ、よそへられたるおりさへ忍びがた
きを、見出だし給ても、

ややもせば消えをあらそふ露の世におくれさきだつ程経ずもがな
とて、御涙を払ひあへ給はず。宮、

秋風にしばしとまらぬ露の世をたれか草葉の上とのみ見ん
と聞こえ交はし給御かたちども、あらまほしく、見るかひあるにつけても、
かくて千年を過ぐすわざもがなとおぼさるれど、心にはなほ事なれば、
かけとめん方なきぞかなしかりける。

この一節は、今まで描写されていたヴィネットを絵と比較することで終わる。その中の風景、和歌、また登場人物の間の相互作用は、単一の連続体として機能し、相互に補完しあう。これは、本文17で明石の中宮が以前に紫の上を見て感じた非永続性の概念を支持している。まず、この本文18の場面は庭を見つめている紫の上のイメージから始まる。しかし、そこで言及される自然の中で、風だけが実際に存在する自然の要素である。なぜなら、自然のイメージの多くは、散文によって比喩的に提供され、さらに和歌に深く反映されているだけだからである。自分の状態を嘆き、紫の上は露（すなわち、涙）を集めるのに時間を費やしたと言える。したがって、この露のイメージは和歌で取り上げられ、庭の萩の葉の上に震える物理的な露の滴としても、また、吹き飛ばされて消滅しようとしている生命の比喩的な露としてもとらえうるものである。ここの登場人物の三人は、和歌的なトポス、それに関連する感情、および意味合いに精通しているため、和歌を調和させることができたと言える。目の前の情景から適切な感情を解釈し、それに応じて和歌的な規範によって義務付けられている適切なイメージを提供することで、この場面を視覚的な隠喩へと拡張した。そのため、彼らの集合的な経験と感情、また適切に実行された感情のパフォーマ

ンスは、感情のコミュニティの基盤になったと思われる。

上記の本文18では、明石の中宮の存在が極めて重要である。なぜなら、中宮による紫の上の詳細な観察は、鮮明なイメージを読者に伝え、それにより、読者は三人の間の交感の妥当性を判断および評価できるようになるわけである。それと同時に、明石の中宮はまた、感情的なパフォーマンスを超え、源氏との感情的な実際の結びつきを示せるような中心人物となる。というのも、あるアフェクトによる感情的な結びつきは、実は、当たり前のことではないからである。その反例としては、本文19、頭中将が源氏に送った、紫の上の死に対する同情を表している和歌を見てみよう。

本文19 (Vol. 4, 「御法」 pp. 177-178)

空のけしきもただならねば、御子の蔵人少将してたてまつり給。あはれなることなどこまやかに聞こえ給て、端に、

いにしへの秋さへいまの心ちして濡れにし袖に露ぞをきそふ
御返し、

露けさはむかしいまと思ほえず大方秋の夜こそつらけれ
もののみかなしき御心のままならば、待ち取り給ては、心よはくも、と目とどめ給つべきおとどの御心ざまなれば、めやすきほどにと、「たびたびのなをざりならぬ御とぶらひの重なりぬること」とよるこび聞こえ給。

頭中将にとって、紫の上の死は、彼の姉妹であり源氏の最初の妻であった葵の上の死の記憶を呼び起こす。それゆえ、その和歌もこれを反映している。どちらの死も秋の満月の頃のことなので、パフォーマンスされた感情、イメージ、および関連性の視点からみれば適切なことである。それでもなお、この和歌は、紫の上との唯一の関係性のためか、より深い感情レベルで源氏と繋がっていないようである。したがって、源氏は丁寧に答えるが、紫の上の死によってどれほど影響を受けていたのかを見せないように、その返信にある程度の社会的抑

制と距離を適用したほうが良いと感じている。要するに、自分の感情の実際の深さを隠す。この例は、感情的なコミュニティが2つのレベルで機能していることを示している。その1つは、ある参加者がある状況に適当な共通の言葉とイメージを通じて表面的に伝達するもの、もう一つは感情がより深いレベルで繋がっているものである。

結論

本論文では、『源氏物語』が物語テキストの中でナラティヴの構造をもってどのように登場人物と読者の感受性を養い、さらに、どのように情動的反応を引き起こすのかについて検討した。それに加えて、ナラティヴにおける死の脱焦点化のため、読者が、亡くなる女性自身よりも、むしろ、その死を観察する登場人物へと感情的に味方するよう条件付けられていることを指摘した。しかし、死にかかっている女性を観察する登場人物は、彼女たちの肉体的な苦しみや、その人の死後の自分がどうなるかということなどよりも、死の美的および比喩的意味に関心を持っているようである。死の予測や故人に対する喪は、他の登場人物のためにアフェクトの源となり、そのアフェクトは内面化され、特定の詩的・隠喩的な言葉を使用して表現された。そして、登場人物と同じように情動をあらわす言葉に堪能であると想定されている読者、かつは登場人物の視点から死を経験した読者は、当の登場人物がどれだけ適切に反応したかを評価し、時折その反応の適切さによって読者自身も感動をうながされる。それゆえに、物語における登場人物と、物語外部の読者との感情的関係で感情のコミュニティが形成されると思われる。死の場面は、『源氏物語』のナラティヴにおいては、感情が極度に高まる典型例であるから、これから他の場面に関してもアフェクトの分析を通じて調査する必要があるが、本論文においては、アフェクト理論と感情のコミュニティによるテキスト分析の可能性を紹介し、欧米圏以外の文学作品との関連性を示そうとした。

【注】

- (1) Esperanza Ramirez-Christensen, “The Operation of the Lyrical Mode in the Genji monogatari,” in *Ukifune: Love in The Tale of Genji*, ed. Andrew Pekarik (New York: Columbia University Press, 1982), 21-61.
- (2) 秋山虔、主な著書に『王朝女流文学の世界』（東京大学出版会、1972年）などがある。
- (3) Haruo Shirane、主な著書に『夢の浮橋 — 源氏物語の詩学』（中央公論社、1992年）、また “The Tale of Genji and the Dynamics of Cultural Production: Canonization and Popularization,” in *Envisioning The Tale of Genji: Media, Gender, and Cultural Production*, ed. Haruo Shirane (Columbia University Press, 2008, pp. 1-46) などがある。
- (4) 引用本文は新日本古典文学大系（岩波書店）による。ただし、踊り字の表記を改めている。

* 討議要旨

まず発表者から、今日使用した学術用語の翻訳「情動性」「感情の共同体」に関して、まだ日本語に訳されたことがない用語だと考えられるため、訳語がこれでよいのかどうか、意見をお聞きしたい、とあった。

山本嘉孝氏は、『源氏物語』は様々な言語に翻訳されていて、現代語訳も何種類も出ているが、Affectという観点から見たときに、様々な翻訳で読むときと、原文で読むときと、どんな違いがあるのか、「感情の共同体」というのは、どの翻訳を読んでも同じかたちで存在するのか、特に原文を読んだときと、翻訳を読んだときで違いがあるのか教えていただきたい、と質問した。

発表者は次のように回答した。たしかに感情の共同体には二つのレベルがある。ひとつは物語の内容で、それはどの言語で読んでもだいたい同じである。その内容に基づく Affect と Community はだいたい同じことであるが、でも実は言語によって、Affect、感情を表すことは、がだいぶ違う。様々な言語でそのニュアンスも変わっていて、そして必ずそのもとの言語と同じものではないと思う。それについては今後の研究で明らかにしていきたい、と述べた。

ロバート キャンベル館長は、日本近代文学研究での事例を紹介し、また、日本の英文学研究において Affect studies の訳語が存在することを次のように指摘した。発表では「情動性」という概念は日本の文学研究では用いられない、とあったが、昨年の6月に早稲田大学で行われた日本近代文学会で、「明治文学再考 — 政治性と情動の領域 —」（日本近代文学会2018年度春季大会（5月26、27日）というセッション、講演会があったため、まずそこを見ていただきたい。たしかに、前近代日本文学についての日本文学研究のなかで、情動、Affect studies、はそれほど研究のなかに影を落としていないかもしれないけれども、日本の英文学研究のなかでは非常にさかんに研究が行われている。成蹊大学の遠藤不比人先生とか、何人かの方が訳語も作っているので、まず学術用語をどういうふう日本語に置き換えられるか、或いは適用されているかということを探ったほうがいいなと思う、と述べた。